「医療」の活用～リハビリテーション職種が思うこと

国立精神・神経医療研究センター病院
精神リハビリテーション部　作業療法士長
森田三佳子

「医療」編集長の樅山幸彦先生（東京医療センター副院長）は，2020年６月のこの「余滴」において「雑誌『医療』への投稿をお待ちしています」と投稿の呼びかけをされている．すなわち，国立病院機構の病院や国立高度専門医療センターなどに勤務する方々による，研究やよかった取り組みの発表の場であり，特定の専門職向けではなく医療従事者すべての雑誌である点が大きな特徴であること，そのため査読はRejectするためのものではなく，より興味深い価値あるものとなるための良い論文となるためにあるとされ「医療論文を書くことに馴染みのない方にぜひ投稿してほしい」とされている．

このような呼びかけは，コメディカルである私から見ると，開かれた性質の国立病院機構の風土をよく表しているように思う．医師と看護師がその根本を支え大多数を占める医療の世界において，医師自らが多職種に向けての呼びかけをされていることは，私にとってはあたりまえのようであたりまえとは思われない．総合医学会に参加してもわかるように，この組織においてはあらゆる職種の発表の場が設けられ，それは開かれたものになっている．例えば事務職の方々のご発表から病院の運営や経営の姿を知ることができる．この開かれたすがたが国立病院機構や国立高度医療センターの特徴であることに今さらながら心を強くする．しっかりとこの「輪」の中に入っていきたいものである．

さて，長い歴史を持つ医療界において，われわれリハビリテーションの参入はたかだか50年に過ぎない．国立病院の中でもいわゆる３職種（理学･作業･言語）の存在が普及したのはここ10年くらいかと思う．ちなみに，1966年より継続されている「図説」シリーズでリハビリテーション領域として特集されたのは，過去に２回．初回は1982年国立療養所村山病院（現:村山医療センター）であり，次に2007年，臼井宏編集委員（医師）の際であった．今後の課題は，今や「予防から」の期待に応えるリハビリテーションが，病院の中でチーム医療の中でさらなる提案や発想をもって役割・期待に応えることである．

さて，最近の「医療」には，感染下での医療体制の新しい枠組みや提案を思わせるものが多く並んでいる．職域が遠いと難しいと思う用語などにも出会う．

「医療」を現場で生かすいくつかのアイデアを考えてみた．

1，知って満足＝同じ組織の人への親しみあるいは尊敬の念を持つ機会になる．
2，コミュニケーション＝その職種の人に声をかけるきっかけにする．質問できたらさらにGOOD.
3，スタッフ啓発＝自分の職場の話題にする．
4，引用＝使えそうな言葉はさっそく自分も使ってみる．
5，想像＝優れたシステムやシンパシーを感じたものは，自分の職場に当てはめてできるかどうか考えてみる．
6，空想＝自分の職場以外の職場に思いをはせる．（異動で行くことがあるかもしれない）

発表の場として，学ぶ場として「医療」をもっと活用したいと思う．